

平成31年度 活動方針

平成30年の直江津港の総貨物量は、対前年比103.4%の7,818,133トン記録し、2年連続の増加となった。また、コンテナ貨物取扱個数においては、中国の輸入規制により再利用資材の輸出が減少したものの、住宅建築資材の輸入が増加したことなどから、前年比111.1%、過去最高となる33,097TEUを記録し、実入りにおいても前年比105.2%と増加している。

今後も取扱量のさらなる増加を図っていくため、利用企業に対して継続利用を働きかけるほか、他港のみ、または他港を併用する利用企業に対してはリスク分散や地理的優位性の視点などからの直江津港利用の提案を行い、利用促進活動に取り組んでいく。

また、直江津港における取扱貨物の大部分を占めるLNGの輸入については、昨年10月から、オーストラリアで展開される「イクシスLNGプロジェクト」により生産されたLNGの直江津港受入れが開始され、さらに、本年5月には新たな火力発電所の建設の着工が予定されるなど、今後も輸入量の増加が見込まれている。これらは、当地域のみならず、国内のエネルギーの安定供給に大きく寄与するものであり、直江津港の重要性が益々高まることが期待される。直江津港のエネルギー港湾としての機能強化を図るため、港湾整備が計画どおり進められることが必要である。

上越沖の表層型メタンハイドレートについては、回収技術開発に関する調査研究等が進められている。直江津港がその開発・研究、生産施設の拠点港に選定されるよう、引き続き、県や市、関係者と連携しながら国等に働きかけを行うとともに、市民の関心を高める取組が必要である。

小木直江津航路においては、平成30年の利用者数は約12万3千人となり、前年比5.9%の減となったものの、新水族博物館「うみがたり」の開業効果により昨夏は前年同時期を上回った。小木直江津航路の利用者の増加に向け、「うみがたり」を契機とした一層の誘客に取り組むとともに、広域周遊の促進やインバウンド誘客を図るなど、関係者の総力を結集して取り組む。

港は、人や物が集まることにより、賑わいや交流が生まれる場である。そうした港の持つ機能を含め、重要な社会基盤でもある直江津港の機能と役割について、直江津港フェスティバルへの実施協力や、日本遺産「北前船寄港地・船主集落」の市の取組との連携等を通じて、より多くの方から港を訪れていただき、理解を深めていただくことも重要なことである。

以上を踏まえ、次の事項を重点目標に掲げ、関係者が一致協力して活動を展開する。

重点目標

- 1：直江津港港湾計画の促進
 - エネルギー港湾としての整備促進
 - 港湾施設の維持、拡充
- 2：直江津港の利用促進
 - 地域産業との結びつきを強めたポートセールスの実施
 - 長野県や近隣地域との連携による利用促進
- 3：国際定期コンテナ航路の拡充
- 4：国の港湾施策並びに次世代資源メタンハイドレート関連施策に関する情報収集及び要望活動
- 5：高速カーフェリー「あかね」をいかした小木直江津航路の活性化
- 6：交流拠点としての直江津港の賑わい創出